

ヨーロッパにおける山岳遭難救助活動

高瀬 洋

富山県警山岳警備隊では、山岳遭難事故者の救助技術や先輩隊員から受け継がれてきた警備隊精神がヨーロッパ諸国と比較するとどうなのか。また、救助隊の組織や活動状況等にどのような違いがあるのかを調査するため、過去2回ヨーロッパに隊員を派遣してきた。

この派遣は山岳警備隊が発足してから10年毎に行われているものであり、発足30周年を迎えた今回は、この光栄の機会が私と常駐隊リーダーの佐伯乗彦君の2名に与えられた。平成6年9月12日から10月4日までの23日間、フランス、スイス、イタリアの3国を訪問し山岳遭難救助組織等の現状を調査した。

調査結果については、以下の通りである。

1 訪問先

国名	地域	訪問先
フランス	シャモニー	シャモニー高山憲兵小隊 国立登山スキー学校 シャモニーガイド組合
スイス	ツエルマット グリンデルワルト チューリッヒ	エアーツエルマット基地 グリンデルワルト警察署 レガ本部
イタリア	ミラノ	ドロミティ山系 アグスター本社

2 主な訪問先の状況

(1) 山岳遭難救助組織等

別表

4. 通難救助技術

別表 各国における山岳遭難救助組織等

国別	調査対象	組織体制	隊員の資格等	保障	ヘリの保有状況	遭難受理体制	備考
フランス	P. G. H. M シャモニー高山憲兵 小隊 (フランス国防 省所属)	隊長 (大尉) 以下40人 他にパイロット、整備士等10人	ガイド若しくはア スビランガンガイド又 は山岳兵の中から 選抜し、特に高山 訓練を受けた者 (ガイドと同等の 実力)	○国の保険、州の 保険に個人保険 ○遭難補償として 死亡時給料の30 %支給	○アルエットⅢ型 2機 パイロット救助隊 員、医師でチーム 編成	各山小屋 (無人小屋 でも) 無線電話機を 備付け、直接 P. G. H. M と交信	年間400回の出動 山岳遭難は殆んど P. G. H. M で 処理
スイス	ツェルマット救助隊	ツェルマット警察署長以下6人、 ガイド80人、パイロット等8人 で構成 (指揮は署長〜ガイド資格者)	ガイド又はガイド と同等の実力者 (警察官は希望者 で異動等で配属)	○州の保険と個人 保険 (2,000〜 3,000万) ○死亡時遭難補償 有	○民間のエアレスキ ユ一会社がアルエ ットⅡ型、ラマー 等3機を常駐させ ている。	各山小屋から無線又 は電話で直接警察署 がガイド組合と交信	死亡事故には必ず 出動 (検死の関係)
スイス	R. E. G. A (民間のエアレスキ ユ一会社)	ジェット機 (リアジェット35A 型2機、レンジャー1機)、ヘリ 15機を保有、国内を10のセクシ ョンにわけ常時待機、要請があ れば世界各国へ出動	8,000時間以上の 飛行歴を持つパイ ロットを更に訓練 (独自の訓練機関 を有する)	○年間2,000円相 当で会員となれ る。 (出動は無料で 扱ふ)	ジェット機 3機 ヘリ 15機 その他多数の待約機 を持つ	全国の各セクション へ直接会員から要請 (24時間体制の指令 室を持つ)	山岳遭難に限らず 交通事故、火災、 病気、一般災害な どあらゆる事故に 出動、年間5,500 回に及ぶ

4. 遭難救助技術

(2) 保険制度

国名	国民	外国人	救助費用の負担	備考
フランス	山岳保険 (フランス山岳会員のみ) 病院は社会保険	SOSモニターニュ (山岳保険で救助のみ) 病院は個人負担	無料 保険でカバーする 徴収することあり	装備、救助費用は国 で保証
スイス	山岳保険 (スイス山岳会員のみ) レガ(財団法人) (1人3,000円相当の 保険加入)	SOSモニターニュ 旅行中、レガ保険に 加入できる	保険加入者は無料 他の者は実費徴収	装備はスイス山岳会 が実費、または保険 で購入
※イタリアでは、アグスター社の視察、同社製「K2」のデモフラトのみ視察				

(3) 隊員の養成、訓練状況

国名	調査対象	隊員の養成	勤務等	備考
フランス	シャモニー 憲兵小隊(フ)	○70%以上の隊員は ガイドの有資格者 ○山岳兵で特に訓練 を受けた者	○週2日訓練 2日待機 2日休暇	○付近にグレンデが有り 訓練 ○訓練日には、ヘリとの 訓練、パトロール有
スイス	ツエルマット、及 びグリンデルワルト 山岳救助隊	○訓練を受けた警察 官、民間のガイド、 及びスイス山岳会 員	○年間60日の 訓練	○警察犬を使つての訓練 (雪崩捜索) ○レガとの合同訓練
※イタリアでは、アグスター社の視察、同社製「K2」のデモフラトのみ視察				

4. 遭難救助技術

(4) 山岳遭難事故発生状況

各基地は、山岳観光地にあり年間300～400件に上る。

(5) 山岳遭難事故防止活動

国名	法規制	登山届	登山標識	山岳情報の提供	登山者に対する指導
フランス	なし	義務なし (届け出の習慣なし、最近届け出る者が出てきた)	ほとんどなし	気象情報については山小屋、各機関で提供 (ポスター等なし)	あくまで登山は各自の責任において行動するが、問い合わせについては各機関は細かくアドバイスをする
スイス	同上	同上	なし	同上	同上

※イタリアでは、アグスター社の視察、同社製「K2」のデモプラトのみ視察

(6) フランス国立登山スキー学校

ガイドの資格を取るには6年間位の実習期間を要し、登山技術、スキー技術、遭難救助技術等を習得する。(合格率は2～3割程度)

(7) エアーツエルマット (スイス)

民間のヘリコプター会社でツエルマット山系の山岳遭難救助にあたる。民間機関ではあるが、山岳遭難救助のために自社費で医者を基地に待機させている。山岳、スキー事故で、年間300件位出動。ヘリコプター4機運用。

(レガはこの区域では活動していない)

(8) レガ (スイス)

財団法人で、スイス国内に11ヶ所、計15機のヘリを配置し、有事即応体制を敷いている。パイロット、アシスタント、医師が1組となり、スイス国は、15分以内に現着する体制。(必要



4. 遭難救助技術

な場合は救助隊員を搭乗)

レガ(スイス)は、15機のヘリコプターのうち既に半数をアグスター社「K2」に機種替えをしており今後、同機を上回る機種が出ない限り全機を「K2」に機種替えするとのことで、同機に絶対的な信頼を置いている。本県においても機種替えの声があることから「K2」の検討が進んでいる。同機が配備されるならば各種メリットは大きく剱岳、立山、黒部、薬師岳方面で活躍することは確実である。



(9) シャモニー高山憲兵小隊(フランス)

警察、高山兵のエキスパート40名で組織、年間の遭難発生件数は400件で、50～80名が遭難死する。ヘリコプター2機運用。

(レガはこの地域では活動していない。)

3 本県との共通点

(1) 救助隊員の意識

- ① 遭難者をより早く医師のもとへ運ぶために、各種訓練、装備の開発等、意欲が旺盛である。
- ② 救助隊員であることに強い誇りをもっている。
- ③ 救助隊員は、「理屈」ではなく「行動」が力である。

(2) 救助組織

軍隊、警察、民間が一体となって、救助にあたる。

4. 遭難救助技術

4 本県との相違点

- (1) ヘリコプター，医師，救助隊員が常時，一ヶ所に待機している。
- (2) 現場出動の99%はヘリコプターにより救助，及び隊員輸送する。
(ヘリコプターにパワーがあることから，少々の悪天候でも年間300日はフライト可能)
- (3) 装備の開発には多額の経費を經常している。

5 世界でトップクラスのレガ（スイス）からの助言

- (1) 「レスキューの原点は，いかに早く患者を医師のもとに渡すか」である。そのために装備，資機材の研究開発，隊員の知識，技術，体力のアップ，それとこれらを十分に発揮させるために，救助に適したパワーのあるヘリコプターを持つことだ。
- (2) レスキュー活動における危険行為は，当然のことであり万一，二重遭難が発生してもそれを非難してはならない。自然の中で活動する隊員にとって，常に完璧はあり得ない。それがレスキュー隊の使命であり，強いては隊員の誇りでもある。

終わりに，今回の研修の成果を今後の山岳警備隊の遭難救助活動に生かしていく決意をすとも
に，関係各位のより一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げまして，ヨーロッパにおけ
る山岳遭難救助活動の報告と致します。

(富山県警山岳警備隊)